

## ◇居合道各流派の戦後史と現況（4）

# 夢想神傳重信流

### 博道の言い残したこと

中山博道は「最後の武士」と呼ばれる通り、妥協のない姿勢で武術を追求した。そのため、居合の技についても、理合に合わない技は自分で改良し、年齢によって技が変わったともいわれる。

自分の流儀についても、夢想神伝流と名乗ったのは戦前一度だけであり、没後になって門人たちが呼ぶようになったということは前項で紹介した。ある意味では現代におけるさまざまな混乱の元にもなっている。

夢想神傳重信流も源は中山博道であり、その成立には複雑な事情がある。

当時、土佐英信流は下村派、谷村派の二派に分かれていたが、中山博道は土佐の居合に深い関心を持ち、明治38年には高知へ赴いて谷村派の森本兎久身らに学んだ。

だが、中山の研究はそれに飽きたらず、その後、懇意だった板垣退助を通して下村派の細川義昌に入門した。他流と絶対混同しない、親兄弟にも言わない、見せないという起請文を書いたの入門である。大正5年のことだった。

そして大正12年に中山は細川に皆伝を与

えられたが、なぜか細川は伝書を渡さないままその年に亡くなった。しかし、「早く中山に伝書を渡さなければ」と最期まで言い残していたという。

以上が従来の定説だが、実は不確かなところもあり、それを反証する資料も示されている。博道自身が下村派を名乗ったことはなく、門人たちに、自分が教えているのは五藤派（＝谷村派）の居合だと語っていたという証言がある。

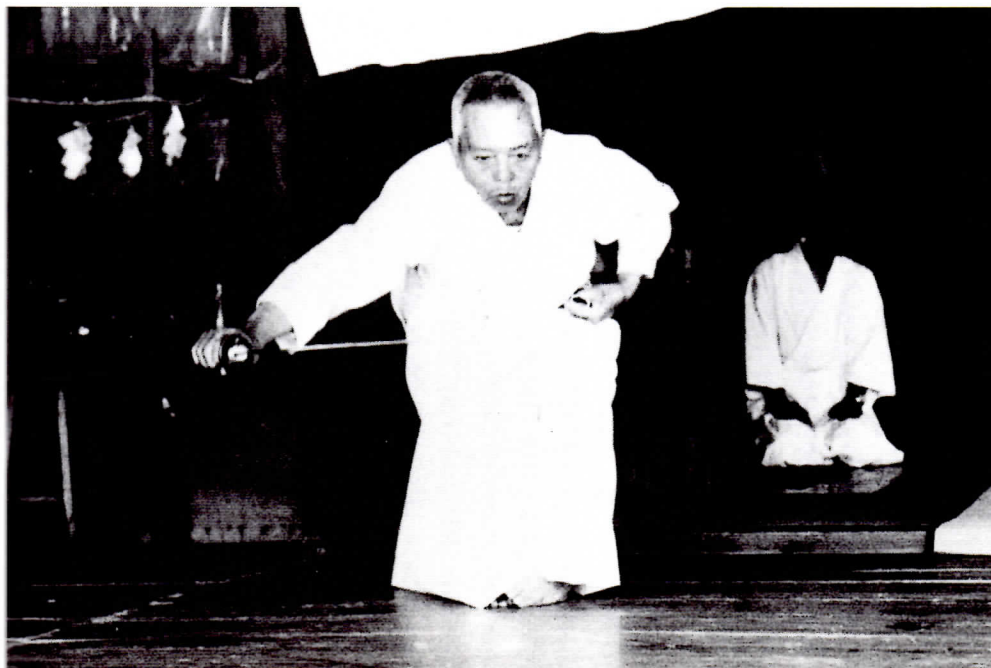
いずれにせよ、年月は不明だが、あるとき博道が門人である木村栄寿に「大正年間に義昌から土佐英信流の奥義を授けられたが、その林崎甚助重信の技の伝書を受ける機会を逸した。いつかそれを写し、解説してほしい」と話したのが夢想神傳重信流の始まりである。

つまり、中山博道が公に演武していたのは、ほとんどの場合に自ら名乗っていたように大森流や長谷川英信流の業であり（それが現在の夢想神伝流の原型となる）、細川から学んだ土佐英信流の奥義であり門外不出の居合、すなわち夢想神傳重信流は、そこに少しづつ取り入れていくつもりであったが、最後まで公開せずに没した、ということであろ

うか。

山口県防府に生まれた木村は呉海兵団に入り、有信館呉支部などで中山に接し、大正8年に入門した。海軍を終えると武道家を志し、昭和2年、防府に剣道場を作る。中山が心信館と命名し、中山の道場有信館の防府支部となった。中山は西下すると数日逗留し、木村を相手に技の研鑽もしていた。研究熱心な木村を中山は信頼していたようだ。

戦後、昭和33年に中山が没するが、40年前後から木村はその作業に一人取り組むことになる。



昭和49年、初の研究会で夢想神伝重信流の業を披露する木村栄寿



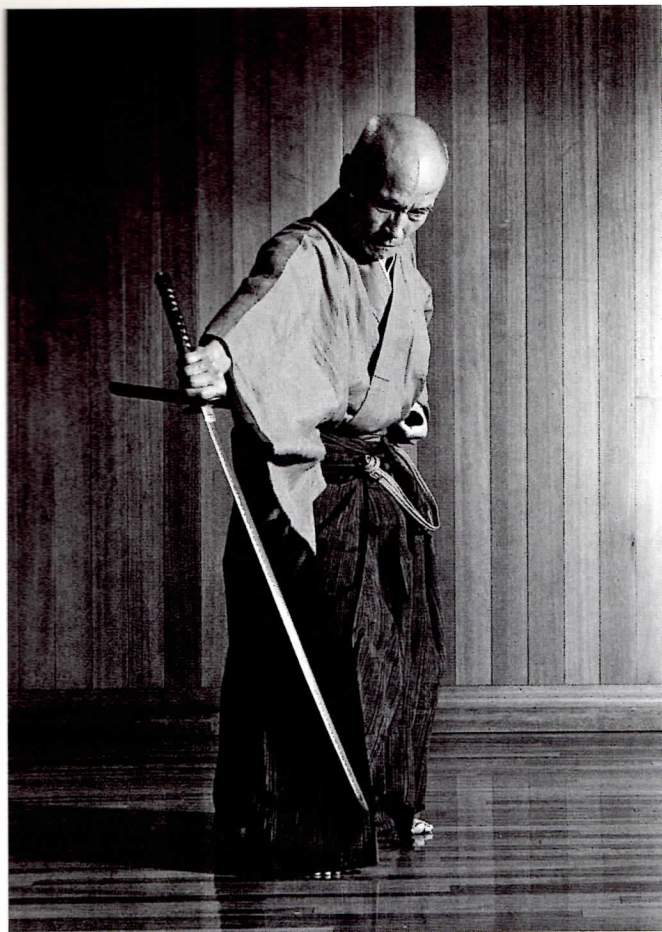
## 三人での研究

木村が細川家を訪ねると、確かに伝書は中山博道に渡すことになっていたと伝えられており、何度も親族会議を開いた上でのことだが、木村に伝書を公開することにした。

その後、木村は一人で難解な伝書の解説につとめ、あるいは新たな資料を収集し、夢想神傳重信流の全貌を著作にまとめる仕事に精魂を傾けていく。

やがて、木村の孤独な研究に関心を示す強力な援軍が現われる。橋本正武と額田長ともに範士九段で中山博道との縁も深い居合の大家である。

橋本は中山の高弟で、有信館幹事を務め



額田長

た橋本統陽を叔父にもち、東大農学部に通いながら有信館で中山に剣道を学んだ。早稲田大学で剣道の選手として活躍した額田は、三菱道場でその橋本統陽に居合を学んでおり、戦後は大阪剣道界の重鎮であった。昭和46年、全日本居合道大会の場で、木村の話に動かされた二人は、木村の手助けをしながら、三人で額を寄せ合い、刀を握って技の研究を続ける。

昭和49年、木村は夢想神傳重信流の講習会を防府で開いた。このとき額田長、橋本正武はもちろん、環量、紙本榮一、沖原功、永江又三郎といった当時の居合道界の重鎮たちが参加している。参加する人たちは起請文を書いた。

だが、この業の披露には反応はいま一つで

あったらしい。半年後にも研修会を開いたが、参加者は半数になった。しかし、木村、橋本、額田の三人は落胆することなく、研究を続ける。

翌年には額田の本拠である大阪・堺の南海錬成館で研修会を行なった。これが防府以外での初めての公開である。昭和53年には、日本武道館で開かれた第1回日本古武道大会で、額田と橋本が夢想神傳重信流と名乗って演武をしている。

木村は夢想神傳重信流の伝書を一応写し終わつたものの、本としての完成を見ずに、昭和53年に逝去した。その後、木村の息子茂喜と、額田、橋本が受け継ぐ。途中額田が健康を害し、最後は橋本と木村茂喜の共同作業で、膨大な伝書を現代文で解釈し、解説文、写真を付した『林崎抜刀術兵法 夢想神傳重信流 傳書解説及び業手付解説』が上梓されたのは昭和57年のことだった。

それから間もなく橋本、額田は病に倒れるが、額田の盟友であった西田英和（本年逝去）が会長となり、門人の尽力で昭和62年に夢想神傳重信流研究会が発足する。翌年には全日本剣道連盟主催の居合道講習会でも古流研究の時間に取り扱われた。

その後紆余曲折はあったが、平成3年に夢想神傳重信

流会と名称を改め、研修会、講習会を続けている。

大阪、滋賀、茨城、京都、奈良、和歌山、福岡、石川など各地に門人がおり、近年全日本剣道演武大会でこの流名を名乗る人も増えている。2008年には14人を数えた。



業の研究に励む木村栄寿（奥）と、額田長（左）、橋本正武（右）